

編集室から

幼少の頃から、両親に連れられて転居・旅に出ているからでしょうか。汽車が大好きでした。蒸気機関車が曳く列車を写真に収めるべく、追いかけていたものです。母親の故郷である北九州や、中学を過ごした北海道では、石炭貨物列車が走っていましたが、編成が長大で、先頭が迫って来ても最後尾はカーブの向こうで、見えないということは良くありました。

さて今日、変化が物凄い勢いで押し寄せているようです。見上げる空の色が変化してるわけでも、啼いている鳥の音が変わった訳でもないの、それとは気づきにくいかも知れません。

さまざまな「キワ」の場に参加していると、まるで天動説が常識だった時代に、地動説が唱えられ始めた頃のように、これまでの常識がひっくり返るような場面に遭遇して、驚かされるのが度重なるようになりました。

時代とは、長いな長い列車のようなものかも知れませんが、車内だけを見ていると動いていないように感じますが、車窓(周り)を眺めると「それなりに」光景が流れていきます。

ところが、これをヘリコプターなど空から眺めたらどう見えるのでしょうか。例えば、列車の先頭は素晴らしい景色の大渓谷に差し掛かっているのに、真ん中以降は殺伐とした砂漠の鉄路を走っている…。列車の先頭が良くて、最後尾が悪いと言いたいものではありません。善悪・良否のことではなく、同じ時代に居ながら、激しく変化を体感している人と、そうでもない人との違いは、時代の流れのどの辺りに居るのかによって、一連の流れの何処を観ているのかが異なるという例えのつもりです。

仕事柄、常に時代の前の方に居なければならぬので、振り返ったとき余計に、後の続く編成が気になるのかもしれない。早晚、時代の変化は、個々人にも必ず訪れます。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆
していただいている川畠さん
が「能登の夜市」の姉妹店を
開店されました。

上京された際、ご利用になっ
てみてください。

もちろん、川畠さんご自身も
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマン
ション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2014/01

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2014/01

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

謹賀新年

睦月



白山比咩神社にて
by hama

濱のつばやき 『企から喜入』

アスリックは、街や地域の将来を考えるシンクタンク・コンサルタントとして設立した。そのシンクタンク業界には、こんな寓話がある。

シンクタンクをして、蝙蝠（コウモリ）と解く。

蝙蝠は、姿は鳥に似ていて、実は哺乳類である。しかし、哺乳類からは鳥だろつと避けられ、鶏からは哺乳類だからと避けられ、どちらにも属するようでも、どちらにも属せない。何処かに居座ることは許されず、常に際（キワ）を彷徨う存在なのだ、と。

シンクタンクは、特定の業界や社会的立場常識にのみ立脚して調査・研究を進めることはできない。業界と業界のキワで、何らかの回答を出さねば、使命と存在価値を果たせない。このためか、過去の常識に囚われず、見知らぬものも怖れず飛び込み、その真価を見極めようとしてきた。

いかなる依頼も最終目的は「人間の幸福」である。このことから、必然的に「人間にとって幸福とは何か」といった哲学的探求の旅が始まる。それは単に哲学という学問に留まらず、身体と心の関係性と安寧に向かい、座禅・滝行・山伏との熊野古道山駆など俗に言つ「見えない世界」に足を踏み入れもした。

街づくり・地域づくり・村おこしの現場には、必ずリーダーがいる。そのリーダーの人となりは、まさに十人十色であり、汎用性のある法則を見出すことは容易ではない。ただひとつ、現場に共通している要素があるとすれば、リーダーの「人徳」の篤さが成果の度合いに影響している可能性が高いことである。

いかにすれば、徳を具現化することができるのか。これがまた、難題である。

ところが、接していて実に「徳」を感じる方々が居られる。表面的な付き合いをしていては感じにくいだが、後から、じわりと感ずることがある。

端唄か都都逸に、こんな唄がある。「思い出すよじゃ惚れ様が浅い。思い出さずに忘れずに。」惚れた腫れたの色恋沙汰と甘んずる事なかれ。実に深い味わいがある。

徳は「積む」という。ここに、「徳」の秘密があるのかも知れない。おそらく「積んだ」ことを意識しているようでは、「徳」に及ばない。普段、自然に歩くとき、足の上げ下げに対して一々角度や力の入れ加減を意識することは無い。呼吸も然り。「できる」と信じきっていることは、無意識にしているものだ。

逆に「できないかもしれない」と思っていることは、「やるう」という意識が働く。意識してやらなければ「できない」と判っているからだ。

だとすると、「思い出さずに忘れず」無意識に積み重ねているもの。それこそが「人徳」であると言えまいか。

孔子は、「八十にして己の思つままにして、なおお則を越えず」と残した。孔子にしてこの齢である。

人徳に通ずる感覚に「感謝」がある。できている方ほど、頭が低い。

時折「感謝しています」という言葉を耳にする。ところが、何かを成した時に人は絶句し、ただ涙し言葉にならない

いことがある。その時の方が、居合わせた者に伝わるものが多いのは何故か。

感謝とは、するものではなく、まして強制されるものでもない。それは、自然と溢れて来るものなのである。感謝の念が自ずから溢れてきたときの、全身が震え、深く刻まれる感覚は、表現しづらひ。

非常に興味深いコミュニケーションの研究がある。真摯に患者の身を思つて接している医者のアドバイスは患者に利き、機械的に伝えてくれるだけの医者の言葉は患者には響かず結果的に受け入れられないという。米国の研究では、言葉による理解は三十五%に過ぎず、残り六十五%は声の質・動作・間の取り方など、どう話しているかによって決まっている。さらに話し手の人物評価は、言葉によるものはわずか七%、発音などが三十五%、なんと五十五%の重きを置かれているのが表情だという。

だから、感謝の無い人・薄い人は、自ずからそれが伝わってしまっている。隠しても隠し通せるものではないらしい。つまり、「何を言っているか」が問題なのではなく、「どう言っているか」が問題なのだ。

最新の演劇での役者の指導には、このような研究結果を応用した発声法が取り入れられている。

人徳にいささか戻つてみると、感謝の薄い人に出遭った時、彼らを軽蔑したり責めていては、人徳は積めない。彼らに出逢ったこと自体から、自分は何を学ぶのか。そちらに意識をむけるべきなのだ。深遠な学びに触れたとき、彼らは「その教え」に気付くために、嫌な役回りを担つてくれたとさえ感じられ、自ずと感謝の念が湧くから、不思議だ。

近年の社会問題は、加害者と被害者の関係が複雑化している。道路の交通渋滞は、交通量を二割削減すると解消する。通信やコンピュータも、わずかに限界を超えただけで全体がダウンする。

つまり、市民が一齐に車に乗るから、渋滞する。一齐に年越しの電話をかけるから、つながらない。ここでは、加害者と被害者が同一である。

かつての企業による公害問題のように特定の加害者を責任追及すれば良い時代ではなくなった。善きにしる悪しきにしる、自分がしていることが即、自分に還つて来る時代。これが、これまでの問題解決法の限界を示す。

問題が顕れた時、その問題の奥に潜んでいる真の原因は何処にあるのか、それに自らはどう係わっているのかに思いを致すことができなければ、解決には向かわない。

地域や企業を元気にするには、制度や事業を改変したり、革新することで問題を解決するアプローチは、今後も必要だろう。しかし一方で、構成する個々人の状況にも丁寧に向き合う必要が益々迫られている。

企業を興す起業にも随分携わってきた。その経験から、経営者・社員も顧客と共に、ほんとうに喜びながら持続的に事業を発展させる」との重要性を学んだ。そのためには、これまでにお手伝いをさせて頂いてきた人材研修の他に、一人一人の歩みをより力強くするお手伝いが必要なのではないか。

今年、個々人の志を磨き、「企業・起業」から「言葉」に変えるお手伝いをより丁寧にするつもりだ。

4/18、私は次のようなメールを全社員に送っている。

「再生計画は確定しました。胸を張って『再生の道筋はできた』ことをアピールして下さい。債権者との関係は一段落、次はスポンサーとの関係の中で、いかに自立するかが問われます。引き続きやってやろうじゃないですか。」

3/22、債権者の多数の賛同により再生計画が認可決定され、この日それが確定。会社再建は最大の山場を超えた。その高揚感が最後の一文に表れている（笑）。今思えば、この言葉は自分に言っていたのだと思う。

その後、再生計画に記載された「減増資 スポンサー決定 返済」の順に物事を進めていく。

まず10日後の4/28に、それまでの株主価値をゼロにする減資と、新たな株式をAMUに対して発行する増資が行われた。旧経営陣が自社株購入を強く推奨していたため、私を含む多くの社員が一人当たり50万円~数百万円もの多大な損失を被った。銀行も見破れなかった粉飾決算に対して、自己責任という言葉を使い、社員の貴重な財産を切り捨ててもいいものだろうか。しかしながら、この無慈悲な結果は如何ともし難かった。

民事再生手続きに突入した前年11月に、公告や記事を見た数社から問い合わせの電話を受けた。ずばり「支援（買収）したい」という意思表示や、「うちがスポンサー募集を仕切る」といった提案まで。当社の再建スキームは「再生計画認可 事業スポンサー決定」の順であったため、ひとまず両社ともにお断りした。前者は後の事業スポンサーに応募し、プロの経営コンサルタントである後者は「逆のスキームではうまくいきこない」と強い口調で迫ったが、恐れるもののない素人は、これを気にも留めなかった。

募集したところ多数の応募を頂き、2月上旬に一次選考で4者にしぼった。謝り続けてきた我々が一転してラブコールを受ける立場になるという不思議。しかも、再生計画への賛成票を得るべく、債権者に粘り強くお願いしている傍らで。勘違いしないようにと言いつつ聞かす。

続いてその4者からの絞り込みに入る。1者ずつの面談を設け、当社からは取締役プラス支社長が出席。「スーパー技術者の引き抜きが目当てなのか」、「すぐリストラするのか」、「支社は統廃合するのか」と単刀直入に聞けるわけではないが、かなりきわどいやり取りを交わす。経営の自主性、安定性、シナジー効果、業界におけるグループ形成と当社の位置付け等を勘案して、4月上旬に優先交渉権者を決定した。

事業スポンサーには、債権者への繰り上げ一括返済に係る資金提供をその条件としている。よって、スポンサーの選定により、自動的に民事再生手続きの完全終結、すなわち、長いトンネルからの脱出が目目前となった。こうして、ついに我々はEXITに到達したのである。

おそらく誰もが経験ある事ではないでしょうか！「宝くじ当たったらどうしよう!？」と。今年の年末ジャンボ宝くじはなんと過去最高の前後賞合わせて7億円です。1億円を超えたのがつい最近だったような気がしたのに、あっという間に7億円です。株価と実体経済が追いついてこない昨今の経済状況とは裏腹に、宝くじだけはバブルのような成長率です。まったくギャンブルに興味がない私もご多分にもれず、競馬の有馬記念とこの年末ジャンボだけは射幸心をぎらつかせてしまうのです。これも12月という年末気分がなせる技ということでしょうか。

さて、非現実的ではありますが、この7億円あなたなら何に使いますか？私は寝る合間やお風呂に入っている時間を使い、ついつい夢想してしまうのです。しかし、わたしのいつもの結末は以下の通りです。

- ・目黒周辺に豪邸でも建てようかな。犬と子供たちが走れる庭はいるな。
- ・熱海、伊豆あたりに家族や気心知れた仲間たちと週末ゆっくりできるゲストハウスも欲しいなあ
- ・フェラーリなんか乗っちゃったりして。でもポルシェも捨てがたい。7億なら2台買えるな。
- ・将来的な安定収益のために不動産投資やマンション経営も必要だろうか
- ・店舗の改装と新業態の店舗開発にも投資したいな
- ・今考えている新規事業にも資金回せるな
- ・子供たちのために貯蓄もしておかないと
- ・双方の親の介護資金もいるな。
- ・でも都市伝説ではないが高額当選者のリストが出回って様々な勧誘がくるからその対策もいるな
- ・まてよどのレベルの人にまで公表すべきかな。友達関係ちゃんと継続されるのかな
- ・大金を手にした事で働かなくなってしまって、アホな人間になってしまうのでは
- ・もしかしたらそれによって失うことのほうが大きくて、実際は幸せな人生ではなくなるかも
- ・そんなことなら事業で頑張って10億円を手にするよう頑張ったほうがいいなあ
- ・あーそんな事に時間を費やすなら、もっと考える事あったのに
とまあ、やはり貧乏人根性、心配性が頭を持ち上げてきて、楽しみよりも不安になり、そして自己嫌悪に陥るのです。そして今年も恒例の風物詩のごとく、このルーティンを繰り返すのでした。かみさんは呆れてます。
成長しないなあ。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

ななつ星の旅(その3) 静岡県職員 溝口 久

「ななつ星」の旅を終え、職場のパソコンを開くと自治体職員のメーリングリストに、うきは市農林・商工観光課の吉弘さんから小生あてのメールがあった。***溝口さんはじめまして!(ななつ星に手を振る時にお会いしたのですが(笑))

地元での「ななつ星 in 九州」への期待は大変大きく、私たちが住むうきは市も久大本線というローカル線が通っており、今回の列車が通過するまちです!

一番列車の運行ということもあり、私ども市民の皆さんやファンの皆様に声かけをしながら「7」に視点をあてて「WELCOME(7字)」の人文字を77人で作るべく作戦を練っていました!公募すると200名を超える応募もあり、当日並びに帰りの日に「おかえりなさい」という7文字で歓迎イベントを行いました。

担当した職員は感無量で現場で涙するなど、なんとか「ななつ星 in 九州」に通ってほしいと声かけを続けてきた私をはじめ、みんなで喜んでいるところです。

歓迎地点まで市役所から20分ほどかかることもあり、「1番列車の通過後の取り組みをどうするか!」というのがありましたが、市民の皆さんと一緒に手をふる活動をしようと、地域内でも盛り上がっています!

ななつ星には一度は乗ってみたいので、溝口さんをはじめ、皆さんご乗車の際には是非写真をアップください!(うきは市のWELCOME画像お持ちでしたらお願いします)

宜しくお願いします!***

彼とは全く面識はなかった。「沈み橋付近での人文字とお手振りありがとうございました。その様子を朝日テレビから渡されたSDカードを小生のデジカメに差し込み動画で撮りました。それがテレビで放映されています。日本テレビのバンキシャ用にも別に動画を撮っていたので、静止画の写真は無いのです。動画がしっかりとれているかは確認してみます。人文字になっているかは車窓からは確認できませんでしたが、ヘリコプターからはわかったかと思えます。」と返事をし、後日動画はDVDにコピーして送った。

早速お礼のメールが届いた。***市長以下担当スタッフで拝見した次第です。

車内からの風景はテレビ画面を通じてしか見た事が無く、改めて感激しました!

車内の風景も大変ステキなデザインですね!***

ななつ星のテーマである「新たな人生にめぐり逢う、旅」の一コマを垣間見た一瞬だった。



うきは市を過ぎ、「ななつ星」は日田駅に滑り込みドアが開いた。日田といえば友人に原次郎左衛門正幸さんがいる。氏から届いたメールには「西日本新聞の記事を送ります。バッチリ大きく映っていましたよ。他紙も見ましたが、西日本の溝口君の記事が、ダントツで良かったと思います。記者も喜んでいてと思います。大分合同新聞の記者が悔しがっている事でしょう。取材対応、有難うございました。娘が11月10日に結婚するのですが、相手が西日本新聞の記者で、今本社の経済部にいますが、同僚が、誰か取材対象の乗客は知らないかと聞かれ、私に連絡が入り、紹介したという事でした。」と書かれていた。

日田市で明治32年創業、老舗醸造元「原次郎左衛門」15代目を継ぐ原次郎左衛門正幸さんは、平成7年、明治・大正期の社屋を観光工場に造り替え、味噌醤油に留まることなくめんつゆ、ポン酢、虹色ラムネも製造、さまざまなチャレンジをしている人だ。最近では日経プラス1でも紹介された鮎の魚醤が評判だ。ナンプラーで知られる魚醤は魚類を塩漬けし発酵させてつくる醤油のようなもの。独特の香りや味を持つクセの強い調味料で、日本では秋田のしょつつる・能登のいしる等が有名だ。しかしこれらはすべて海水魚からつくる魚醤で、鮎のような淡水魚の魚醤は世界中どこにも例がない。一度お試しあれ、料理が引き立つこと間違いなし。さらに肉醤も開発したこと。

「ななつ星」から外に出るとホームに人が溢れていた。その中に原さんを見つけることができた。来ていたのことは知らされていなかったので驚きと同時に嬉しかった。日田の宿「よるずや」の女将の大石美智子さんは初対面にもかかわらず、この旅の最終日に再度日田駅に寄った時に、待ち構えていてくれて日田の銘菓をプレゼントしてくれた。降りると握手をされたり一緒に写真撮ったりで大騒ぎだった。ファーストゲストを当てた強運にあやかるうというものか?相撲取りが体を触られるけど、その類かなー。

原さんに限らず多くの友人・知人が、まるで自分自身が乗っているかの如く小生が「ななつ星」のファーストゲストになったことを喜んでくれ、「自分の知り合いが乗っているぞ」と自慢してくれた。

日田を過ぎると最も楽しみにしていた由布院駅下車の場面だ。昨年11月に「ななつ星ファーストゲスト当選」の知らせがあった時にすぐに電話をしたのが由布院温泉亀の井別荘主の中谷健太郎さんだ。「ホ、ホントかへー。わしの周りに当たったなんて言う人は一人もおらんでえ。運が強いなー」「そりゃそうですよ!そうできゃ由布院観光総合事務所の事務局長を勤めるようなこともなかったでしょう」と答えた。(つづく)

